

## 新書で読める社会学・2025年版

### 【家族】

- 湯澤規子『「おふくろの味」幻想——誰が郷愁の味をつくったのか』（光文社新書、2023年）  
吉川徹『ひのえうま——江戸から令和の迷信と日本社会』（光文社新書、2025年）  
ブリントン『縛られる日本人——人口減少をもたらす「規範」を打ち破れるか』（中公新書、2022年）  
三谷はるよ『ACE サバイバー——子ども期の逆境に苦しむ人々』（ちくま新書、2023年）  
平山亮・古川雅子『きょうだいリスク——無職の弟、非婚の姉の将来は誰がみる？』（朝日新書、2016年）  
澁谷智子『ヤングケアラー——介護を担う子ども・若者の現実』（中公新書、2018年）  
竹端寛『ケアシケアされ、生きていく』（ちくまプリマー新書、2023年）

### 【学校】

- 志水宏吉『学力格差を克服する』（ちくま新書、2020年）  
内田良『教育という病——子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』（光文社新書、2015年）  
トッド『大分断——教育がもたらす新たな階級化社会』（PHP新書、2020年）  
竹内洋『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、2003年）  
本田由紀『教育は何を評価してきたのか』（岩波新書、2020年）  
佐藤文隆『職業としての科学』（岩波新書、2011年）  
吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書、2016年）

### 【会社】

- 戸森麻衣子『仕事と江戸時代——武士・町人・百姓はどう働いたか』（ちくま新書、2023年）  
禹宗杵・沼尻晃伸『〈一人前〉と戦後社会——対等を求めて』（岩波新書、2024年）  
濱口桂一郎『ジョブ型雇用社会とは何か——正社員体制の矛盾と転機』（岩波新書、2021年）  
首藤若菜『物流危機は終わらない——暮らしを支える労働のゆくえ』（岩波新書、2018年）  
河野龍太郎『日本経済の死角——収奪的システムを解き明かす』（ちくま新書、2025年）  
小川さやか『「その日暮らし」の人類学——もう一つの資本主義経済』（光文社新書、2016年）  
井上智洋『メタバースと経済の未来』（文春新書、2022年）

### 【地域】

- 貞包英之『消費社会を問いなおす』（ちくま新書、2023年）  
岸本聡子『水道、再び公営化！——欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』（集英社新書、2020年）  
近藤克則『長生きできる町』（角川新書、2018年）  
立岩真也『介助の仕事——街で暮らす／を支える』（ちくま新書、2021年）  
白波瀬達也『貧困と地域——あいらん地区から見る高齢化と孤立死』（中公新書、2017年）  
藤原正範『罪を犯した人々を支える——刑事司法と福祉のはざままで』（岩波新書、2024年）  
永吉希久子『移民と日本社会——データで読み解く実態と将来像』（中公新書、2020年）

### 【世界】

- 森本あんり『宗教国家アメリカのふしぎな論理』（NHK出版新書、2017年）  
金澤周作『チャリティの帝国——もうひとつのイギリス近現代史』（岩波新書、2021年）  
今野元『ドイツ・ナショナリズム——「普遍」対「固有」の二千年史』（中公新書、2021年）  
梶谷懐・高口康太『幸福な監視国家・中国』（NHK出版新書、2019年）  
木村光彦『日本統治下の朝鮮——統計と実証研究は何を語るか』（中公新書、2018年）  
池亀彩『インド残酷物語——世界一たくましい民』（集英社新書、2021年）  
中野剛志『世界インフレと戦争——恒久戦時経済への道』（幻冬舎新書、2022年）